# 学 位 論 文 の 要 旨

氏名　川上　武紘

[題名]

THA 術後に患肢を自覚的に長く感じる場合は短く感じる場合と比べ、Forgotten joint score の結果は不良である

[要旨]

研究背景

人工股関節全置換術（Total hip arthroplasty: THA）術後の患者の満足度を下げる要因として、脚長差(Leg length discrepancy: LLD)がある。画像的な脚長差(Radiographic-LLD: R-LLD)が 5mm 以内であっても、患肢を長く感じる患者もいれば、患肢を短く感じる患者もいる。本研究の目的は THA 術後の自覚的脚長差(Perceived-LLD:P-LLD), R-LLD と Forgotten Joint Score(FJS-12)の関係を明らかにすることです。

方法

片側変形性股関節症患者 164 名を後ろ向きに検討した。THA 術後の P-LLD を元に自覚的に短くかじる(Perceive short: PS 21 名)、自覚的脚長差なし(no LLD: PN 121 名)、自覚的長く感じる(Perceive long: PL 22 名)の 3 群に分けた。また、THA 術後の R-LLD を元に、<-5 mm(R-LLD short: RS 36 名)、-5 mm< x < 5 mm (no R-LLD: RN 99 名)、5 mm ≥(R-LLD long: RL 29 名)に分けた。さらに、RN 群における P-LLD の割合も評価した。それぞれの群において、P-LLD, R-LLD と FJS-12 の関係を調査した。

結果

THA 術後 FJS-12 は PL 群で不良であった(PS: 68.3 ± 26.2, PN: 75.0 ± 20.9, PL: 47.3 ± 25.2, P < .0001)。R-LLD に評価では 3 群間において FJS-12 は有意差なかった(RS: 73.7 ± 21.1, RN: 70.0 ± 24.5, RL: 67.7 ± 25.4, P < .53)。RN 群における PL の割合は 12.1%であり、RN-PL 群は FJS-12 は明らかに不良であった(RN-PS: 65.4 ± 24.8, RN-PN: 73.8 ± 23.1, RN-PL: 41.8 ± 27.6, P < .0001)。

結語

THA 術後 1 年の FJS-12 は自覚的に患肢を長く感じる群において不良であった。また、画像的な脚長差が 5mm 未満であっても、自覚的に患肢を長く感じる場合は FHS-12 は不良である。

（様式９号）

# 学位論文審査の結果の要旨

令和５年12月20日

| 報告番号 | 医博甲 第 1695 号 | 氏　名 | 川上 武紘 |
|---|---|---|---|

| 論文審査担当者 | | |
|---|---|---|
| | 主査教授 | 篠田 晃 |
| | 副査教授 | 伊東 克能 |
| | 副査教授 | 坂井 孝司 |

学位論文題目名（題目名が英文の場合、行を変えて和訳を括弧書きで記載する。）

THA 術後に患肢を自覚的に長く感じる場合は短く感じる場合と比べ、Forgotten joint score の結果は不良である

学位論文の関連論文題目名（題目名が英文の場合、行を変えて和訳を括弧書きで記載する。）

Forgotten joint score is worse when the affected leg perceived longer than shorter after total hip arthroplasty.

掲載雑誌名　Journal of BMC Musculoskeletal Disorders

第24巻　　第1号　Article number. 440（2023年　5月　掲載）

著者（全員を記載）

Takehiro Kawakami, Takashi Imagama, Yuta Matsuki, Tomoya Okazaki, Takehiro Kaneoka, Takashi Sakai

（論文審査の要旨）

研究背景

人工股関節全置換術（Total hip arthroplasty: THA）術後の患者の満足度を下げる要因として、脚長差（Leg length discrepancy: LLD）がある。画像的な脚長差（Radiographic-LLD: R-LLD）が5mm以内であっても、患肢を長く感じる患者もいれば、患肢を短く感じる患者もいる。本研究の目的は THA 術後の自覚的脚長差（Perceived-LLD:P-LLD）, R-LLD と Forgotten Joint Score（FJS-12）の関係を明らかにすることです。

方法

片側変形性股関節症患者164名を後ろ向きに検討した。THA術後のP-LLDを元に自覚的に短くかじる（Perceive short: PS 21名）、自覚的脚長差なし（no LLD: PN 121名）、自覚的長く感じる（Perceive long: PL 22名）の3群に分けた。また、THA術後のR-LLDを元に、<-5 mm（R-LLD short: RS 36名）、-5 mm< x < 5 mm（no R-LLD: RN 99名）、5 mm ≧（R-LLD long: RL 29名）に分けた。さらに、RN群におけるP-LLDの割合も評価した。それぞれの群において、P-LLD, R-LLDとFJS-12の関係を調査した。

結果

THA術後FJS-12はPL群で不良であった（PS: 68.3 ± 26.2, PN: 75.0 ± 20.9, PL: 47.3 ± 25.2, P < .0001）。R-LLDに評価では3群間においてFJS-12は有意差なかった（RS: 73.7 ± 21.1, RN: 70.0 ± 24.5, RL: 67.7 ± 25.4, P < .53）。RN群におけるPLの割合は12.1%であり、RN-PL群はFJS-12は明らかに不良であった（RN-PS: 65.4 ± 24.8, RN-PN: 73.8 ± 23.1, RN-PL: 41.8 ± 27.6, P < .0001）。

結語

THA術後1年のFJS-12は自覚的に患肢を長く感じる群において不良であった。また、画像的な脚長差が5mm未満であっても、自覚的に患肢を長く感じる場合はFHS-12は不良である。

本研究は、THA術後1年に患側が長いと感じる場合はFJS-12 が不良であるということを証明した論文である。
よって、学位論文として価値があるものであると認めた。

備考　審査の要旨は８００字以内とすること。